

五三四頁、第二冊は五七八頁、前者は太初より幽囚まで、後者は幽囚より紀元一三五年迄が含まれて居る。

現在に於て従来の基督教の解釋に對して多くの人々の不満が有ると考へられる。従つて基督教に對して、殊に、斯の教が初めて傳道された當時に就いての研究は大に起りつゝあることは周知の事實である。

併し、イスラエル民族の通史に就て見るときに、神の選民たる意味に於て特殊の取扱ひが、未だ充分に除去されて居ないやう考へられる。本書が、イスラエル民族を説くに當つて、絶えず、彼等の周圍に注意を拂ひつゝ、歩が進められて居ることが知られる。その範圍が屢々弘きに失するのではないかとさへ思はれる程である。序論に於て、バビロン、アッシリア、埃及を説き、更にアマールナ時代より、當時のイスラエルを觀ることにして居る。又考古學的立場をも併せとり、發掘による史料をも檢討したる後、本文に入つて居る。斯くして、宛然、イスラエル民族を中心として見たる古代東方史とも謂ひ得られる。

従つて、本文に於ても、絶えず周圍と接觸を保ちて居る姿を窺ひ得られる事は、やがて、強いて、イスラエル民族を選民とのみ見ないで、寧ろ周圍に影響を授受する有様を背き得られる。

アケメネス王朝の波斯と交渉を持ち、アレクサンドロス大王及びその後繼者の有したる希臘文化の風潮を如何に觀るかに就いても示唆に富むのが感ぜられる。殊に重暎として覆ひかゝつて來る羅馬の勢力に關しても、それが謂はれる。斯くして、遂にエルサ

レムの陥落となり、最後に、ハドリアヌス治下に生じた、アエリア・カピトリナの植民地の創設に對する叛亂となり、五十萬以上は落命し、生ける者が流浪の民に出る有様を叙して居る。

尤も、長き時代に互り、弘き範圍に及んで居るだけに、細かに詮索する時に缺點があるであらう。又、必ずしも、最新の研究を悉く網羅した苦心の作とは云へないかも知れぬ。併し、豊富なる挿畫は、懇切なる叙述を生かして居ると云ひ得ると考へられる。

歐米の學者の多くの努力に依つて、種々なる發見がなされた。今後もこの意味に於て、幾多の研究が積まれることであらう。しかも、東方の姿を再檢討することが我々に與へられた課題とするならば、歐米の斯界の權威の力作をよく理解する上からしても、本書の如きに據つて一先づ基礎工作をなすことは決して無意義ではない又通史として觀るに於て更にその價值を有するものかと信ぜられる。(岡島誠太郎)

地理論叢 第十一輯 皇紀二千六百年記念號

京都帝國大學地理學教室編

時代の轉換の中にあつて、地理學の重要性が認められ、ば認められる程、自己の無力を味はねばならぬ地理學徒は、新しい地理學の建設に必死の努力を續けてゐるのである。然しながら、新地理學の建設は坦々たる大道を歩む様なものではなくして、ジャングルの中に踏みまよつた旅人にも比せられるであらう。

皇紀二千六百年を記念して、京大地理學教室が、新地理の建設に

挺身して居る第一線部隊の卒業生を動員し、その日頃の研究の一端を集めて發表した事は、誠に意義ある事であり、混沌たる地理學界は、此の書に依つて、一つの建設の、従つてまた批判の具體的なものを持つたと云ふ事が出来るであらう。

全二十五篇は四部に分たれて居る。その内容は次の如くである。

(一)

小牧實繁 日本地政學の主張

米倉二郎 地理學と世界觀

野中健一 地理教育我觀

宮川善造 滿洲國家地理序說

川上健三 資源論

(二)

柴田孝夫 我國土の地理學的省察

木村憲治 我國に於ける米穀需給關係

淺井得一 邦人の氣候適應性に就いて

村木達郎 日本疾病地理學序論

瀧木貞一 地理的環境としての衣食住

(三)

小葉田亮 近世諸家に於る興亞思想

室賀信夫 近世蝦夷地開發論の地理學的視角

辻田右左男 吉田松陰と國防地理學

藤田元春 佐藤政養先生と其地圖

野間三郎 明治時代と人種問題

(四)

和田篤憲 道路と開拓

吉田敬一 日支交通史より見たる五島平戸列島

別枝篤彦 詩經と楚辭とに現はれたる風土的性格

小野鐵二 米國の西進と東亞經濟圈と關聯して

中江 健 日滿支ブロック内の砂糖の需給(豫報)

田中秀作 東邊道開發の地理的意義

島 之夫 滿洲國の道路型と聚落型

野澤 浩 需給關係より見たる北支(蒙疆)炭の特殊性

岩根保重 支那トルキスタンの政治的構造

御子柴幸一 英領四太平洋諸島に於る單一栽培

今此處で此等の論文を一々紹介する餘裕がないけれども、此等の論文の全體を通じて、一つの方向を認める事の出来るのは、非常に喜ぶべき事と言はねばならない。これより數ヶ月前に發表された小牧教授の「日本地政學宣言」と併せ考へる時、京都帝大地理學教室がその進む道を明確に把握した事を知り得るのである。次に發表せられるものに大きな期待を持ちつゝ、その健闘を祈る次第である。

皇紀二千六百年に間に合す爲か、校正が不充分なのは本書の價値をいさゝか傷つけて残念である。

(古今書院發行、五六〇頁、菊版定價五圓五拾錢)(川上喜代四)

國史善本集影

大阪府立圖書館編纂